
黄昏ララバイ

rozan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏ララバイ

【Nコード】

N6416C

【作者名】

rozan

【あらすじ】

『黄昏ララバイ』

見ず知らずの少年との奇妙な出会いに遭遇した老人のだが、別れ際に自宅に來たがる少年を招いたことで、驚愕事件に発展してしまう。

塀状にコンクリートで築かれた小瀑布の滝池前にでて、葉桜に覆われて木洩れ陽がちらちらと彩りを落とすベンチに私は腰掛けた。そして、目の前の滴り落ちる幾重もの糸水が広げる僅かな涼を浴びながら中空を見上げると、そびえ建つ新都庁魔天閣双頭の鎌首が、威圧的にもたげかけている中央公園内にいた。

左右二脚ずつ並べ置かれたベンチには、ホームレスと一目で判る風体をした四人の中年男が、それぞれ晩春の微風を受けて長々と寝入っていた。

その姿に視線を這わせながらも、歩道の前方から近づいてくる学生風の男に焦点が定まった。

驚いたことに、さつき会ったばかりの万引き少年だと判るにつれて、言い知れぬ心騒ぎを覚えてしまう。だぶついたズボンをばたばた揺らせ、ゆっくりとした足取りの少年から思わず視線を外したい衝動に駆られたが、なぜか瞠若たらしめた。

さつき量販店内で万引きをした紛れもない少年だと思いながら、四、五メートルほどの距離に近づいてきた少年に、平静を装って「よお、また出会ったなっ。偶然？それとも小父さんの後をつけてきたんかい」と、掛けたくもない声をかけてみた。

「先公（先生）見てえに、いちいちウツゼエよ。俺の勝手じゃねえんか」

少年はそう虚勢を張って、ズボンのポケットに両手を突っこみ、滝池前で、私に背を向けて突っ立った。

「万引き品の立て替え払いをした小父さん、余計なお節介だと怒っ

ているんかね。もしそうなら謝るよ、悪かった。息子のことを思い出して、他人事とも思えなかったただけなんだ」そう少年の背に向かって詫びながらも、疑懼^{ぎく}を覚えずにはいられなかった。

だが、立ち去るべき思いとは裏腹に、坐るベンチから腰を浮かすことを戸惑っていた。それはたぶん、少年の背負う心の重創を感じ取った気がしていたことで、後ろ髪を引かれる思いであつたろう。少年は立ち去る素振りもみせず、視線を避けるかのように後ずさりして、そのままベンチの私の傍らに腰を落とし込んで来た。その仕種には、怖さよりもいじらしささえ感じられて、おかしくもある。しばらく言葉を失ったまま時を流し続けていると、少年は上着のポケットの中から携帯のカセット・プレーヤーのようなものを取り出した。そして、連結した両耳用の耳に当てがったレシーバーから軽快なリズム音が微かに漏れ出して、私の耳をくすぐりだした。

話す気もなさそうで、私を無視するかのようにはミュージックを楽しむだけの少年には業を煮やし、ベンチから立ち上がり「じゃなっ」と、少年に別れを告げた。すると少年は、咄嗟に私の右腕を掴んできて再びベンチに坐れとばかりに強い力で引き下げる。

仕方なくベンチに坐り直したが、すると彼はレシーバーを耳から外しとり、スイッチを切った。

私は、のっぴきならぬ事態へと引き込まれてしまいそんな予感を抱き、多少、身構えた。

「これ小父さんのカセット・テープだよ、返す」そう少年は唐突にいいながら、携帯プレーヤーの中からカセット・テープを抜き出して、私の膝上に突きだした。

「さっき、万引きしたやつかい？」

「……………」

小父さんには不要な物だから、気にしないで君が聴いたらいいよ。とにかく店側で事を荒立てないでく

れて、本当によかったよなっ」

「別に欲しかねえよ、こんなもんはよお」

「でも欲しかったから、あんな事したんだろうに？」

「こんなの、気晴しで何時もやってんだっ」

「気晴らしだったと言うのかい？小父さんだって憂さはあるんだよ。ただ、トラック一杯盗んだとしても晴れやしない、始末に終えんたちの悪い憂さだになっ」

「物をかつさらうと、汚ねえもん皆ぶっ飛ぶよっ」

——この少年は、何かに恨みを抱いているようだ。量販店に対してか、それとも学校の先生。あるいは両親か仲間などへの面当てなのかは解からぬが、出しゃばって代金を立て替えた私に対しての怒りでもなさそうだ。

新宿駅西口量販店から二十分ほど歩いた中央公園内の入り組んだこの場所なのに、たいして時間差も無く少年と再会したのは不自然すぎる。もしかしたら後を付けてきたのでは……。そして今、同じベンチの隣に腰掛けているということは、何かの企み、いや目的があるに違いないとも思えてしまう。長い茶髪を後頭部で一つに束ね、眉毛を半分ほど剃り落とした風貌から察するに、とうてい礼言葉を掛けに後を追ってきたとは思えない。

テープを返すだけなら、こんな場所まで付いて来なくても容易に返せたはずだろう。たぶん、お人好しだと思って執拗に私の後をつけ、ずうずうしい願い事でもする積もりでは。でなければ恐喝か、因縁をつけにきたという可能性だってあるかも知れないが、口の重い突っ張り少年の幼い横顔を垣間みると、つい私の疑念は消える。人一倍、気の弱い私の息子とて、一度はこの少年と似たような風体をしていたこともあったから、驚きよりも親しみさえ覚えてしまうのだが、だとしても、見ず知らずの少年に無防備に心まで許してしまうという訳にはいかないと思ひもするが、突如、出現した少年を無二の親友になるのではなどと、私の孤独感が求めてしまう自覚が

あった。

「君は腹を空かせてないかねっ。良ければ何かごちそうするぞ」

「こいつらと一緒にすんじゃねえっ」そう、粗野な態度で言う少年は、左右のベンチで寝そべるホームレスたちに視線を突き刺して、顎をしゃくりあげて見せる。

「小父さんもなっ、この歳まで精神を汚し続けてきたんだよ。こんな都心の公園に散歩という訳でもなく来てさっ、生気を失いかけてベンチに坐っている老人の姿なぞ、ホームレスと何ら変わりやしないのさ。だから君っ、こんな小父さんだと知ったいじょう、避けたいとは思わんのかい？」

知らず知らずのうちに打ち解けて受け答えしていた少年は、急に押し黙る。多感な少年の心の傷に触れるのは、もうこれ以上は止そう。

私はそう思いながら、再びベンチから腰をあげだした。

「何かおごってくれんじゃねえんかつ、小父さん」

少年は再びそう言った。

「だから、さっきも言っただろう、おごってやるってさっ」

私は、急に素直さを感じだした少年を従えて、中央公園裏の成子坂下通りに出ると、目前にある鉱泉湯場ビル一階の、食堂に入っていた。

「君が良ければだけど、ここの風呂にも入っていいよ。食事の後でも先でもいいが」

私は、少年を友人でもあり息子でもあると思いをダブらせて、心の浮き立つのを覚えていた。

少年の言葉の反応はなかったものの、満更でもなさそうな素振りだけは感じとれていた。

「よしっ、食事の前に一風呂浴びよう」そう言って、私は一方的に浴場に向かいだした。

少年は、裾を極度に絞ったダブ付いたズボンのポケットに両手を突っ込んだまま付いてきたが、周囲の老客から奇異な視線を浴びだ

した。

3

だが少年は、プレーヤーのレシーバーを耳に当てがいでして、仏頂面で後に従っていた。

脱衣場で臆する風もなく裸になる少年は、大きめなグレーの半袖シャツとダブダブの黒ズボンを着けた姿からは、とうてい想像し得ない華奢な体を露出した。

だぶついた衣服は、体の小さなエリマキトカゲが襟を大きく逆立てて威圧して見せるのと同様な、防衛本能かも知れないと連想してしまう。

隣に坐る少年の洗い桶湯を何げなく横目で見ると、酷い汚れで黒ずんでいた。

「君は風呂、何日振りなんだい？」

「知らねえよっ」

「おいおい待てよっ。そのまま湯船に浸かっちゃ駄目だ。髪も先に洗ってからにしてくれよ。他人を汚いというからには、まず自分を綺麗にしなさいよ」

私はそう言いながら立ち上がりかけた少年の腕を掴むと再び坐らせた。そして備え付けのシャンプー容器を掴み取り、彼の頭髮にタップリ掛けた。

六十歳になる私の頭髮は粕尾であるが、いまだに若々しく見えているのではと思ひ込んでいる。

その毛髪を指先ですき挙げながら、鉱泉湯前で少年と別れて青梅街道方面に歩きだしていた。

別れたばかりの少年が気になって振り返って見ると、驚くことに、またしても飼犬が付きまとうように私の後をついて来る、少年の姿があった。

「君、君っ。家はこっちの方角かい？」

十四、五メートルほど離れた後方の少年に、声を投げてみた。

少年は、両手首をズボンのポケットの中に突っ込んだまま風のよ
うにズボンを伸ばして広げ、ぷあぷあど風をはらませながら足早に
駆け寄ってくる。

我ながら生まれて初めて、ちょっかいを出した難解な行為である
が、些かの辞易感と、ちょっぴりの去りがたさもあって複雑な心情
だった。とはいえ、何時までも知らぬ未成年者を引き摺り廻してい
るわけにもゆかず、きっぱり突き放そうと思ひもするが「小父さん
と一緒に帰るよ」と言いながら傍らに擦り寄る少年には、苦笑いを
浮かべてしまう。

「そうか、家はこっちの方角なのかい？」

「家は代々木だよ」

「えっ、それじゃ反対の方角だろう」

「いいんだ、小父さんの家にいくよ。困るんか？」

「……独り暮らしでさして困ることないが、でも、来てどうしたい
んだい？」

「別にっ」

「……まあいい、きたけりや来いよ。すぐその柏木通り沿いで、
古びた安アパートなんだ」

私は少年の真意が掴めぬままに、そう言った。

私の住むアパートは、大家が地上げ屋に売却したと半年ほど前に
通知があつて、居住は今期の契約期限までと一方的に決められてい
た。だが、一、二階を含めて八つ有る部屋のうち、七部屋に居住し
ている（水商売に携わっているだろう）女たちの誰一人として、い
まだに退室しないようだった。

私の契約期限もすでにきているが、一週間ごとに手紙や葉書など
で、退室をしつこく迫られ続けてもいた。

九年前に私が経営していた測量会社は倒産を余儀なくされて、残務整理後に運よく残された杉並区の小さな住まいを処分して得た金は、別れを求めた妻と息子の養育費に渡し、僅かに残った小金を手にしてこのアパートに入居した。そして、囑託としてある測量会社に勤めだしてはいたのだが、それも辞めねばならぬ歳で無職となった。

宛も無く気の進まぬ仕事探しが日課となっている今は、心許無い蓄えであるにも拘わらず、憂さ晴らしだけには、小金を注ぎ込んでいた。

アパートに着いた私は、郵便受けから一通の葉書を取りだして読み「またか」と一言つぶやいた。

「金の催促かよ、小父さん」

「まあ似たようなことだ。こんな葉書のことはどうでもいいから、早く、君は靴を脱いで上がったらいい」

玄関の上がり框に腰を据えながら少年にそう言うと、背後の階段を駆け降りてきた三十歳位の女が少年をしげしげ見据え「あらっ、息子さんなの」と訊いてきた。その女は、隣部屋に住む水商売の慶子であった。

「いや、違うんだ」

私が答えると、慶子は怪訝そうな顔をしたものの「そう、私、いま買物に行ってくるのよ。何か美味しい物でも作ってあげようかしらっ」

慶子はそう言って、バイオレット・マニキュアの指先に挟んだ煙草をルージュの唇に軽く添え、大きく吸い込む煙を燻らせながら路上に出て行った後、私の顔を訝しげにのぞきこむ少年に「隣の住人なんだ」と言った。

アパートは調理場が二階と一階に一つずつ有るだけの共同炊事場で、以前、豚汁に似たごった煮をしたことがある。

鍋をとろ火のガス台に掛けてグツグツと煮込んだまま、部屋に戻ってうたた寝をしてしまった私だが、目を覚まして大急ぎで廊下にある台所に駆け寄ると、何と、ごった煮は程よく味付けされてガス台から下ろされていた。すると、背後の部屋に住む女（慶子）がドアを開けて「それで味、良かったのかしらっ」と、淡いピンクの透けたネグリジェ姿のままで声をかけてきた。

夕方頃に、派手な化粧顔で夜の店に出勤する女とは何度かアパート内で擦れ違ったことはあるにはあるが、女はそのつど目線を伏せて、言葉を交わすことを避けるかのようにした。さして興味を抱かぬ女であったから私も挨拶一つしないでいたのだが、素顔にネグリジェをしどけなく纏う彼女は別人のように艶いて見え、隣室にこんな魅力的な女性が住んでいたのかと、当時は驚きもした。そんな彼女とは煮物を通して親しくなっていて、しかも肉体関係まで持つようになった。だが、そんな慶子は間もなく小金を何度もせびりだし、私は其の都度小金を渡すそんな関係が続いていたある日のことだった。

やくざっぽい風貌の三十中ばだろう男が慶子の留守部屋を訪れてきて、鍵で部屋のドアを開け入った光景を私は偶然目撃してしまった。それ以来、不安を感じて慶子とは二度と関係をもつまいと、意識的に顔を合わすことさえ避け続けていたのだが、いま再び逢瀬を重ねてしまう切っ掛けにもなりはしないかと、新たな不安が過ぎりだしていた。

5

「小父さんの部屋は二階だよ。どうした、帰りたくなったのかい？」と、躊躇う少年の肩をボンと叩いて言った。すると少年はスニーカーを素早く脱ぎ棄てて、勝手知ったかのように目の前の階段を駆け

上がっていった。

「この部屋なんだ」 私がそう言ってドアを開けた。

少年は八畳部屋の中にずかずかと入りこみ、狭くも整頓してある部屋の中をぐりと見渡してから、窓際に置かれた和風文机にもたれかかるように、畳の上に両脚を投げだして腰を据えるのだった。

「わび住まいで驚いたろう。物には執着しなくなって贅沢品など何一つない部屋なんだ。だが、小父さんだって君の歳ぐらいには人の物であれ何であれ、欲しい物は手に入れたと思う衝動を抑えきれなくなったことだってあるよ。いま思えばずいぶん無茶をしたもんだが、あの頃は人の痛みなんて考えられなかったんだらうなあ」

「小父さんもスリルを味わったんか？」

「いやなっ、物質が乏しい時代だったから悪戯にスリル感を味わったんじゃないって、生活必需品が欲しかったんだと思うがねっ。それでも歳を重ねて罪悪感が身に付くにつれ、馬鹿をしないように自然と身に付いていったってわけさ。だから君だって、心を養う体験をしたんだよ」私はそう言いながらも、少年の胸中には後悔という痛みだって抱え込んでいるに違いないと思うのだが、実の息子であったとしたら、こんなに寛容な対応ができたのか……。物だけでなく、人に危害まで及ぼしたと少年が言ったとおりなら、激怒していたに違いない。

そして再び少年に「今日は学校を休んだのかい？」と訊いてみた。

「昨日は行ったんだ。大体一日置きくらいだよ」

少年は、相も変わらず無表情顔で言う。

「それでも先生や親たちは、何にも言わないのかい？」

「……殺人鬼のいる家なんて、帰りたかねえよっ」

「聞き捨てならんなっ。殺人鬼って誰のことなんだい？」

「親父がババアとできちゃって、それに汚職騒ぎが続いたから、おっ母、死んだんだ」

「婆さんとかい？」

「家にいる今の後妻のババアだよ。自殺だと言ったって、親父がお

つ母を殺したと同じじゃん」

「……………」

私は言葉を失ったまま、少年の微かな目頭の潤みを見て取った。そして幾重にも絡まった知恵の輪が、一挙に解かれだしていた。

殺風景なこの部屋には唯一、退職時に会社から贈られた、小粒の花が連なるヒスイ宝石のような光沢を放って描かれた絵画を、壁に掛けていた。

一度こんなヒスイの輝きに似た花があるのなら、本物のヒスイカズラを見てみたいと思いきや、今は何となく、くすんだ色調に見えている。

そのとき部屋のドアがノックされ、同時に無遠慮に開けられた。そして、片手に買い物袋をぶら下げたままの慶子が入ってきた。

「本格的なカレーを作ってあげるんだから、弟君はすぐ帰っちゃ駄目よっ」そう慶子は言うのと、背を向けて再び部屋から出て行った。

「それじゃ夕食を済ませてから帰ってもらうことにするよ。悪いなあ」

温泉ビル食堂で食事を摂って来ていた事で、私も少年も空腹ではないのだが、慶子の好意を何故か断れなかった。

6

仕方がないと思いながらもドアの外の慶子にそう言うと、再びドアが開けられて、慶子が顔を覗かせながら「辛口も甘口もできるのよ。君はどっちがいいのっ」と訊いてきた。

「……………」

「どっちでもいいんだろうよ、でも仕事に行くのが遅くならないのかい」

私が少年の好みを訊かずに代わって答え、夜の店への出勤を気遣った。

「今日は休みを取ったのよ。それより、どういう二人の関係かは訊

かないわ。でも、弟君の名前ぐらいは知りたいわよ」

慶子は少年に興味をもったのか、なれなれしく弟君と勝手な呼び方をして、執拗に声をかけてきた。

「そういえば小父さんも」と言って、前を訊いていなかったことに気付いた私は、少年の顔に視線を向けた。

「甥御さんだったんだ……でも何で名前を知らないのさ」

慶子は、小父さんという言葉に反応してそう訊いた。

「小父さんと言ったって、親族なんかじゃないよ」

「平池慎二」少年は、重い口調で名乗った。

「ステキな名前なんだけど、私は慎君って呼ぶわっ」そう言って、半開きのドアを閉めて炊事場に再び向かう慶子の「あらっ！」という小声が聴こえてきた。そして「おめえの留守、部屋ん中で先から待ってたんだがよっ、隣の部屋から、おめえに似た声が聴こえてくるじゃねえかつ。まさかとは思ったが、矢っ張りおめえだったんかい。そんな部屋ん中で、何をさらしくさってんだい」と、ドアの向こうから、慶子を責め立てる男の声も聴こえだしてきた。

以前に目撃したことのある、やくざ風の男であろう。ついに恐れていた事が差し迫ったと、私は固唾を呑んだ。

慎二は、悠然と両脚を畳の上に投げ出したまま、文机を背にして坐っていた。

「ちよっと、そこを退けや。奴の面、拝んでやっからよっ」

私の部屋に来ようとしている男を、慶子が止めているのだろう。喚き立てる男の声と「住んでいる皆に迷惑だから、止めてよっ」と制止する慶子の声も聴こえてきた。そして「うるせえ」という男の言葉に続き、ドアが荒々しく開け立てられた。

男は無言で部屋の中を見回すと「おっと、おめえじゃねえかつ。こんなところに隠れよってからに！」というなり部屋の中に踏み入ってきて、慎二の襟首を強引に掴みとりだした。

「子供に何をするんだ。手を離せっ！」

男は私の声など無視して少年を引き倒し、顔面を拳で殴りだして

いた。

私はあわてて止めに入ったが、体力の勝る男に簡単に撥ねのけられた。

「慶子っ、警察を呼べっ！」とっさに私が叫ぶと、慎二の顔を殴りつけていた男は腕を止め、私の方を振り返った。

慶子と呼び捨てにしたことを後悔するが、その反応はすぐに男の表情と、部屋の中に入ってきていた慶子自身にも表れた。

その慶子は、危険な状況を察知したかのように、部屋の外へ逃げるように飛び出していく。

男は、馬乗りになっていた慎二の体から離れると、鋭い視線を私に突き刺しながら近づいてきた。そして、襟首を掴まれてねじ伏せられ、眉間に拳を何度も見舞われだした。

何でもない男が親しげに「慶子」などと呼ぶわけもなく、もはや弁解などは頭には浮かばない。

じたばたせずに気の済むまで殴られているしかあるまいと、観念せざるを得なかったが、何発も殴られた顔の神経はマヒしてしまい、歳でもろくなっている骨など一たまりもなく打ち砕かれて、間もなく死ぬかも知れないと思いもする。

7

すると「あっ、ううっ……」というような呻き声と同時に申し掛かっていた男の体の重みが、ふわっと宙に浮くように軽くなる。

恐る恐る目を細めて開けると男の顔はなく、代わりに慎二の見下ろす顔が視界に入る。

顔をもたげようとはする私だが、畳に張り付いてしまったかのようになく感じられて上げられずにいると、すかさず私の背に腕を回してきた慎二に抱き起こされた。そして、私の眼に映ったのは、海老が丸く縮こまったような体勢で、畳の上に横たわる男の姿であった。

男は、自らの掌で血の流れ出る脇腹を押さえ込んでいるのがわかり、さらには、血糊の付いた登山ナイフが畳の上に転がっていた。窓を背に呆然と突っ立ったままの少年の眼に視線を当てるが言葉にはならなくて、目まぐるしく動揺する思いが頭の中を駆け巡る。とりあえず救急車を呼ばなければならないと思うのだが、その前に慎二を守らねばと思ったつ。

「今、救急車を呼ぶが、君は小父さんの部屋に来ていた事など忘れて家に帰ってしまうんだ。そして、二度とここへは来るな。巻き添えにってしまった君には、本当に悪いことをしてしまった」

「小父さん、俺が悪いんだ。このゲン兄いはシャブの売人やっていて、そのことで俺とトラブったことが前にあったんだ。その腹いせで俺が察（警察）に垂れ込んでアジトをばらしたから、察に追われてたのに達公から俺がばらしたことを聞きだしたゲン兄いは、未だに俺をしつこく追っかけ回してたんだ」

「そうだったのかい……」

「だから、一日置きに学校に行っているなんて言ったの嘘なんだ。待ち伏せされるのが怖いから、休みっ放しだったんだ。だから、こんなところでゲン兄いに偶然出合ったんで、殺られるに決まってると思ったんや。けど、チャンスがあったから俺の方から刺した。だから、庇ってくれんでいいんだ」

「そういえば、多少変だとは思ったよ。いきなり関係ない君に襲いかかったんだから。でも、君には判からない事だけど、小父さんにも原因があったんだ。だから後は小父さんに任せて、君は帰ってしまえ」

「……………」

「この男の傷が快復して君の存在を警察に話されたとしてもだよ、女にちよっかいを出して男と諍い合う内に、部屋に置いてあったナイフで『小父さんが男を刺した』と言い張るよ。たとえば、どんな罪を問われることになっても、一つの人生を終えている身だし、悔いはない。この男が快復しても、どうせシャブの売人の罪であれ何で

あれ、刑務所には間違いなく入る男だろうから、あえて、君の存在を主張して、自らの不利を招くことはないだろう」

「どうして、そんなに俺を庇うんだ、小父さん」

「いいかい、先のある君をこんな事に巻き込みたくはないだけだ。もう君は逃げる必要もなければ安心して学校にも行ける。それでも警察に問われることにでもなればだが、事件は見ていただけたと、君の得意とする突っ張りを見せたらいいのさ」そう慎二に言い聞かせて横たえた男に視線をあてると、その顔面は蒼白で、気絶しているかのようにも見てとれた。

私はナイフを拾い上げると、タオルで慎二の指紋を入念に拭いたり、そして自らの掌にナイフを握り締め直す。

窓から射し込む落陽を背に立つ慎二の肩口は、小刻みに揺れていた。

一刻も早く慎二をこの場から遠ざけて男を治療させなくてはと、焦りを覚えだす。

8

「君は早くこのアパートから離れろよっ。それに今日のことは忘れてしまっただ、いいなっ」

慎二の肩を抱え込みながらそう言って、追い払うように部屋のドアを開けて廊下に押し出した。

慎二のいなくなった部屋で電話の受話器を耳に押しあててはみる、プッシュフォン・ボタンに触れる指先は、どうしても躊躇する。テレビのニュースなどで知る息子の衝撃や将来への影響を思い、しまい、何て自分勝手な決断をしてしまったのだろうか、身の震えが襲う。だが脇に転がる痛ましい男の現実には打ち消され、力強くボタンを押した。

間もなく救急車と同時にパトカーも駆けつけて私は緊急逮捕され、手錠をかけられた。そして二人の警官に両脇を抱えられながら、ア

パートの外に連れ出されてバトカーに乗せられようとした時だった。どこからともなく飛び出してきた真二が継り付きだして「小父さん、俺がやったんだろうよ。どうしてだか解かんねえ。ポリ公、俺を捕まえて小父さんを放せっ。放せって。本当に小父さんは悪かねえんだ。本当なんや」少年は涙ながらに必死に訴えだした。

「あんたの知り合いかい？」警官が私に訊いた。

「公園で知り合ったけど、私の名前も知らないはずの何の関係もない少年ですよ」

私がそう否定すると、警官は連れの警官と一瞬顔を見合わせるが「そこを退きなさい」と、慎二はパトカーから遠ざけられた。

リャーウィンド越しに振り返って見る慎二は涙を榜佗と流し、またしても犬のように追いついて来る。だが、その姿も腫れあがった瞼の眼で追う視界からは、次第に潤んで遠ざかる。

「慎二、頑張れや」と呼びかける胸中、不思議と孤独感や憂さは消えうせていた。

取調べが続く二日目に、私は傷害致死罪を適用された。

私の怠惰な生活がゆえ、少年や男を巻き添えにしてしまったことを悔い、男の成仏を秘かに念じるその瞼の奥底で、息子と少年の熱い涙が重なっていた。

完

この物語はフィクションである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6416c/>

黄昏ララバイ

2010年10月29日14時25分発行